

国内研修活動報告書

私は8月22日から27日にかけて島根県隠岐郡の島前地域で国内研修を行った。新宿から夜行バスで約12時間、フェリーで約3時間かけて着いたその先は海や森林などの自然に囲まれている島であった。

初日である22日はキンニャモニャ祭りという、しゃもじを両手に持ち踊る祭りに参加をした。この祭りは地元の方だけでなく大阪などの他県からも参加し、また若い世代から高齢者まで様々な世代の方たちが音頭に合わせて踊っていた。もちろん、私たちも参加をした。島前に来る前に、一度踊りの練習をしてきてはいたものの、なかなかペースが掴めないのと、少し恥ずかしいのもあって上手く踊れなかった。しかし、踊っているうちに馴れてきたり、周りの参加者の方が笑顔で踊っているのを見て、段々と上手く踊ることができた。まだ、島前へ来てあまり時間が経っていなかったが、地域の一員というものに一步近づいた気がした。

キンニャモニャ祭りが終わり、一時間ほど経つと花火が上がった。海上に浮かぶ船から打ち上げられていて、海沿いで見ていた私は、今まで見た打ち上げ花火の中で一番近く感じた。夜行バスやキンニャモニャ祭りでの踊りの疲れが一気に吹き飛ばすほど綺麗で、迫力があつた。

翌日の23日では、島前高校ヒトツナギ部との交流会が行われた。ヒトツナギ部とは島内外に住む中高生を対象に島の魅力を伝えるためのホームステイや探検をするという活動をしている部活である。交流会は大学生3人、高校生3人で一つの班を作り行われた。大学生と高校生でペアになり、お互いの共通点をいくつかさせるのかというアイスブレイクを行った後、この一年のヒトツナギ部の振り返りを行った。高校生は、今年良かった点や去年と違う点、活動をする際に自身の心配していることを上げていった。本来ならば、大学生は高校生の振り返りを手助けをいなければならないのだが、私はヒトツナギ部への知識が少なかったためにサポートをすることが出来なかった。今思えば、疑問でもなんでも思ったことを口に出すことが出来たら新たな視点からの振り返りが出来たのではないかと感じている。

1時間ほど振り返りをした後、次に地域の方へしたい質問を考えた。このヒトツナギ部では地域の方に協力してもらう場面が多いため、高校生はそこを気にしているように見えた。ヒトツナギ部に対する印象やホームステイの際にどのような負担があるかなどの質問が上げられた。その後、実際に地域の方をお招きし、先ほど考えた質問を高校生が投げかけた。私の班に来られた地域の方はヒトツナギ部やその活動について、とても良い印象があると言っていたため高校生は少しほっとしているようにも見えた。その他にも、ヒトツナギ部のエピソード

ソードなどを語っていただいたり、振り返り時には出てこなかった今年の良かった点をあげてもらったりと大学生、高校生とはまた違った視点からヒトツナギ部についての評価を聞くことができた。

その後、地域の方の話を踏まえた上でもう一度振り返りをし、今まで出た良い点、悪い点を付箋に書き整理をした。

今回の交流会で感じたことは、ヒトツナギ部の高校生が真剣に地域のことやヒトツナギ部について考えているということだ。私の高校生時代を振り返れば、これに打ち込んだというものが無く、特に思い出に残るような出来事が少ない。そのため、何かに一生懸命打ち込んでいる高校生を見て非常に格好良く見え、そんな彼らから多くのことを学ぶことが出来たように感じた。それと同時に、この日の自分自身の新たな課題を

翌日の24日は島前観光を行った。西ノ島、海士町、知夫島の中でそれか一つの場所へ行くと言うもので、私は西ノ島内を観光することにした。まず行ったところは西ノ島の海であった。この日は少し雲があるぐらいの天気で、波も穏やかだった。水着に着替え私は一目散に海に向かって走っていった。少し冷たかったがとても気持ちがよかった。一通り泳ぎ終わり、まだ時間があつたため宿に一度戻ることにした。行きはバスで来たが、帰りはバスの時刻と合わなかったために歩きで帰った。歩いていると、行きのバスでは気づかなかった風景や自然がそこにあり、とても感動した。宿舎につき、少し休憩してから私たちは次に由良比女神社に向かうことに決めた。どっちの方向かはなんとなく知ってはいたが、詳しい道のが分からなくなってしまった私たちは、近くにあつた干物屋さんの主人に道を聞いた。主人はわざわざ店から出てきてくれて、私の肩に手をかけ道のを教えてくれた。とても気さくな人で、島民の優しさが垣間見えた瞬間であつた。教えてもらった道のを歩き、私たちは由良比女神社に着くことが出来た。お参りをした後、近くにあつた看板に「摩天崖まで約6km」と書かれていたのを見つけ、摩天崖まで歩くことにした。みんなと話しながら坂を上ったり、下ったりするというのはなんだかとても心地が良いものであつた。道中には、放牧されている牛などがいたり、綺麗な海が見えたり、西ノ島の豊かな自然を感じる事が出来た。しかし、いくら歩いても摩天崖までたどり着かず、時間制限もあつたため諦めて帰ることにした。

夕方になると、西ノ島で生まれ育つた4年生の近藤弘志さんの家でバーベキューをした。近藤さんのご家族や近所の方にアワビやサザエ、お肉を提供してもらい、みんなでおいしくいただくことができた。近藤さんのご家族も、近所から集まってくれた方も皆優しく、改めてこの島に住む人々の心の温かさを感じた。

その後、宿に戻り、今日自分たちが観光したところの自慢大会を西ノ島男子

チーム、西ノ島女子チーム、海士チームに分かれて行った。それぞれのチームが3回ずつプレゼンをし、毎回投票するというシステムで行われた。優勝したチームには隠岐牛が食べられるという特典があったため、皆必死にプレゼンをし、とても盛り上がる事が出来た。結果は、私が属する西ノ島男子チームが勝ち、見事隠岐牛を勝ち取った。

次の25日は島前にインターンに来ている他大学の方とのワークショップが予定されていたが、台風により船が動かなくなってしまったため、翌日に延期され、この日一日は宿で過ごすことになった。お昼に、宿から出られない私たちのために近藤さんがパンを買ってきてくれ、それを食べた後に明日のワークショップがどういう流れで進むかについての説明を受けた。その後、本来ならば26日に帰ることになっていたが、台風によってフェリーが動かなくなるだろうと言われていたので一泊増やして帰ることになった。

翌日の26日はまず、中学生と交流するために西ノ島中学へと向かった。着いたときはまだ中学生が授業を行っていたので、私たちは別室で待機した。木造の校舎は初めてだったが、なんだか懐かしいと思える、そんな雰囲気であった。中学生の授業が終わり、私たちは体育館へと向かった。体育館に着くと、もう既に中学生は並んでいた。今自分が思っていることや感じていることを素直に話すというアイスブレイクから始まった。大学生は全員発言していたが、中学生は緊張をしているのか何人かしか発言しておらず、もしかしたら皆内気な性格なのかと不安になった。中学生1、2人に大学生が1人付き、今までの人生をライフストーリーチャートというものに表し、振り返った。ヒトツナギ部であまり話せなかった自分を反省し、今回はどんどん話そうと意気こんでいった。まずは、事前に作ったライフストーリーチャートを見せながら私の人生を語っていき、次に中学生が自分の人生を振り返りながらチャートを作っていた。部活のことや進路のことなどの話を交えながら振り返りをしていると、中学生もどんどん話してくれて盛り上がる事ができ、初めに抱いた不安は払拭された。1人の中学生のこれまでの人生を見ていると、家族との問題について書かれていた部分があった。私はそこを詳しく聞くべきか、聞いてはいけないところなのか非常に迷った。というのも、もう一人の中学生には一つ一つのことについて詳しく聞いていたからだ。私は結局聞くことができなかったが、こういふときはどうするべきなのか今でもわからない。しかし、そこを詳しく聞くことで、もっと深く、質のある振り返りが出来たのではないのかと思っている。

中学生との交流会が終わり、午後からは島前にインターンとしている他大学生徒のワークショップが行われた。この日は、船が欠航していたため Skype でビデオ通話をしながら行われた。学生が地域に入る意義とは何か？そこでどのような事が出来るのか？などをみな真剣に考えた。インターン生は、私たち

が発表したことについて詳しく聞いてきたり、わからない点があった場合にすぐに疑問を投げかけてきたにもかかわらず、私たちはあまり発言をすることが出来なかった。こういうときに気後れせずに、堂々と発言ができないという点が私たちの、しいては私の弱点なのだと感じさせられた。その後、近藤さんをはじめ実際に地域で活動する方々のお話を聞かせていただき、このワークショップは終了となった。同じ年代でもここまで様々な方面で行動しているということを知り、自分にとっての刺激となった。

この日の夜は、明日で終わる島前合宿で心に残ったことやみんなへの一言を言いあった。中には涙を流すものがあったり、この合宿ですごした日々がいかに濃いものかを思わせる一時であった。

今回の合宿では、普段関わることが少ない中学生や高校生、インターン生などの方々や島前に住む人々と話すことができ、様々な刺激や学びを得ることが出来た。同じ大学にいても接触する機会がなかった、先輩や後輩とも仲良くなれ、今後の大学生活をよりよくする仲間を作ることが出来た。自分自身の新たな課題を見つけることが出来たこの島前合宿に、10代最後の夏に参加したというのは非常に有益なことだと思う。今回、学んだことやわかったことを活かし、これからの大学生活を送ろうと思った。(4053字)